あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール 情報誌

THE PHOENIX HALL

世界と出会う♪小さな宇宙 20th Anniversary

Salon

Vol.99 2015年11月 冬号

ホール2Fホワイエ壁画 ポール・ギアマン作「野外のヴァイオリニスト」

CONTENTS

01 Prime Interview — 幣 隆太朗
03 Phoenix Presents — 2016年度ティータイムコンサート発売
05 Pick Up
07 Memories of 20 seasons — メモリアルインタビュー 加藤種男
11 Essay de say — 人生における分岐点 三原 剛

あいおいニッセイ同和損保

2016年10月、ティータイムコンサートに登場 ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ コントラバス奏者 幣 隆太朗さん

幣 隆太朗（へい・りゅうたろう／コントラバス）　1999年 東京藝術大学入学。2001年 ドイツ・ヴュルツブルク音楽大学入学。DAAD外国人のための学内コンクールで1位となり、奨学金を授与される。05年 同大学ディプロマ試験を最高得点で卒業、同大学院マスターコースに入学。同年ベルリン国立歌劇場オーケストラ（シュターツカペレ・ベルリン）のアカデミー試験に合格、首席指揮者ダニエル・バレンボイム指揮のもと、オーケストラの一員として研鑽を積む。07年シュトゥットガルト放送交響楽団に入団。10年からサイトウ・キネン・オーケストラのメンバーとして公演に参加。ソロリサイタルのほか、室内楽でも活発な演奏を行っている。

ドイツの名門・シュトゥットガルト放送交響楽団で活躍の一方、国内では珍しいコントラバスが主役となるリサイタルを精力的に展開する幣隆太朗。そんな俊英コントラバシストの「良質な室内楽を聴かせるアンサンブルを」との呼び掛けに応えて、「ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ」は、2013年に結成された。国内外でソリストとして活躍する白井圭(ヴァイオリン)や、2010年に難関・ミュンヘン国際コンクールで2位入賞を果たした横坂源(チェロ)を核として、フィリップ・トーンドゥル(オーボエ)、ディルク・アルトマン(クラリネット)やヴォルフガング・ヴィプフラー(ホルン)、ハンノ・ドネヴェーグ(ファゴット)らシュトゥットガルト放送響の首席級の管楽器奏者が加わり、鉄壁のアンサンブル能力に裏づけられた洗練性の一方、愉悦も湛えた音楽創りで、大きな話題に。そんな精鋭集団が、ザ・フェニックスホールのティータイムコンサート・シリーズに登場。結成のきっかけとなったベートーヴェンの七重奏曲を中心に、佳品を披露する。「気心の知れた仲間と共に、室内楽の神髄へと迫りたい」と力を込める幣。上質で贅沢なステージが、期待できそうだ。

（取材・文：寺西 肇／音楽ジャーナリスト）

■「ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ」は、2016年10月21日(金)午後2時開演。入場料4,000円(指定席)、友の会3,600円。学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時～17時)。
[プログラム]ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 作品20　ほか（予定）
（詳細は3ページをご参照下さい）

楽友と奏でる 室内楽の神髄

白井 圭 (ヴァイオリン)

ヤニス・リーバルディス
(ヴィオラ)

横坂 源 (チェロ)

―「ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ」結成のきっかけは?
もともと、チェロの横坂源君がシュトゥットガルトに留学していて、彼が留学した少し後に、私のシュトゥットガルト放送交響楽団への入団が決定しました。それで、彼とご飯に行ったり、お酒を飲んだり、自分の大学院の卒業試験へ彼に客演してもらったり、遊びでの合わせをするうちに、「彼と何か、日本でも出来たら良いなあ」と思うようになりました。さらに、2009年に初めてサイトウ・キネン・オーケストラへ参加したとき、何かとてつもない凄い音が(笑)、練習の休憩中に前の方から聞こえてくるので、「何だろう?」と思ったら、ヴァイオリンの白井圭君が練習していたんです。その時に直感で、「室内楽を日本でやる時には、彼にお願いしよう!」と思いました。

―結果的に、弦楽器はヴィオラ以外が日本人、かたや管楽器はヨーロッパ人と言うメンバー構成になりましたね。
先ほどお話ししたように、もともと弦楽器の日本人メンバーは決定していました。そして、私が子供の頃にベルリン・フィル八重奏団のメンバーの大阪でのステージを聴いて以来、ずっと憧れの作品だった、ベートーヴェンの七重奏曲を演奏したいと思って…シュトゥットガルト放送響のメンバーの中でも、特に自分が大好きな人たちに声を掛けました。

―アンサンブル名の「ルートヴィヒ」は言うまでもなく、ベートーヴェンのファースト・ネームですね。
この名称は、初めての日本での演奏会の後に決まりました。やはりドイツ人…もちろん、日本人もですが…は、本当にベートーヴェンを敬愛していますよね。

―皆さんのベートーヴェンの七重奏曲の演奏を聴きましたが、音楽の流れがとてもいい。このアンサンブルの特長、特に音楽創りやサウンドのこだわりなどについて、教えてください。
ありがとうございます。音楽創りは、やはり議論好きのドイツ人が多く、日本人もヨーロッパ歴が長いので、遠慮なく話し合える環境がとても気に入っています。細かい所でも気になればとことん話し合う、これが凄く良い所ではないでしょうか。そして、白井圭君が、実質的に音楽的リーダーであり、指揮者だとも考えていますので、彼のアンサンブルをまとめる力も、素晴らしいと思っています。彼のウィーン節が入った歌い回しも、憎いですね(笑)。そのメロディーの下で、ドイツ流のかちっとした伴奏が、とても活きるんですよ。

―雰囲気も、とても良さそうですね。
大変仲が良いアンサンブルだと思います。打ち上げも毎回、ビールをたらふく飲みながら大盛り上がりします(笑)

―実際に合わせてみても、想像した通りの出来でしたか。
想像通り…というよりも、想像以上だったので、皆がもっと、このメンバーで続けていきたいという意思を持つようになりましたね。

―皆さんは本来、オーケストラの奏者ですね。室内楽の経験が、オーケストラでの活動にフィードバックする部分はありますか。逆に、オーケストラ奏者として独特の、室内楽における音楽創りの方法は?
メンバーの数がオーケストラよりはるかに少ないルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズとして活動した直後は、耳が音楽の細かな部分まで聴き取れる状態になっていて、オーケストラまでが室内楽的に聞こえて、「ああ、耳が洗練されたのだなあ」と凄く楽しくなります。逆に、オーケストラにおいては常に大曲を、優秀な指揮者と共に演奏しています。彼らがどのように楽曲を形創っていくかを間近に見ているので、その経験が室内楽に生かせている実感もありますね。

ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ
Ludwig Chamber Players

2013年、欧州で活躍する日本人若手演奏家とシュトゥットガルト放送交響楽団のメンバーを中心に、多数の受賞歴を持つソリストたちにより結成された。18〜19世紀の室内楽をレパートリーの中心に据え、近・現代音楽にも意欲的に取り組む。2013年東京・春・音楽祭に出演、翌14年はラ・フォル・ジュルネ音楽祭での出演をはじめ、全国6都市のツアーを展開、ファンを増やしている。15年の日本ツアーでは、東京交響楽団ソロ・コンサートマスターの水谷晃が加わり、念願のシューベルトの八重奏曲 ヘ長調 D809を演奏。紀尾井ホールのほか新潟、神戸、名古屋、沖縄、長岡で公演した。

―コントラバス奏者にとって、室内楽とは? 特に古典作品においては、“常に存在する楽器”とは言えませんが…。
どうして出番が少ないのか、もどかしい部分は確かにありますが…(笑)。当時のコントラバスの技術レベルからすると、仕方なかったのかも。特にベートーヴェンなどは、凄く演奏の質に関して厳しかった人物だったと聞いていますから、コントラバスは、なかなか自分の理想には届かなかったのでしょうね…。でも、「もしも、現代のように、優秀な奏者が大勢いたら、どうなっていたのだろう?」といつも空想しています。ただ、コントラバスの入った室内楽にも、知られていない秀逸な作品、しかも、伴奏の役割にとどまらず、ソリスティックな役割を持った楽曲なども、実はまだたくさんあります。この辺りも、これから取り上げてゆきたいと考えていますので、コントラバス好きの皆様にも、ぜひご期待いただきたいですね。

―そもそも、幣さんがコントラバスを始めたきっかけとは?
父親がコントラバス奏者(元広島交響楽団首席奏者)で、ある日、小さいサイズのコントラバスをどこからか調達して来ました。厳しかった父から、「お前、今日からこれを弾くよな?」と問われて、思わず「はい」と答えてしまい、それから弾く事に…(笑)そして、楽器を始めた頃から、「たぶんプロになって、オーケストラの奏者として働くのだろうなあ」と、漠然と思っていました。

―ソリストとしても、精力的に活動されていますね。
きっかけは、東京で生活していた時に、特に対人関係で悩んでいて、ヨーヨー・マのCDを聴き、「音楽でこんなにも“話せる”のか」と感動したこと。当時は、人と話すのが苦手でしたが、「これほどに楽器で“話せる”なら、自分もやってみたい!」と思ったんです。私はコントラバスの、ソロ楽器としての可能性を強く感じていて、これまで地元・神戸をはじめ、大阪や東京などで10年間、リサイタルを続けて来ました。少しずつですが、認知されて来て、とても有り難い事に、今年度の神戸市文化奨励賞も頂きました。これを励みに、20年、30年と続けたいと考えています。

―コントラバスの醍醐味とは。
包容力だと思います。オーケストラや室内楽で、みんなの音を包み込む事が出来ること。そして、ソロでは、どの楽器にもない、太く人のハートへダイレクトに訴える事が出来る音、そこをとても意識していますし、気に入ってもいます。

―幣さんの、音楽家としての夢は。
音楽、そしてコントラバスを、もっと極めてみたいですね。

―ところで、ザ・フェニックスホールについては、どんな印象をお持ちでしょうか。
私自身が関西出身なので、「関西」と言えば必ず名前が挙がる、素晴らしく、美しいホールだと思っています。室内楽にも、最も適していますしね。

―ティータイム・コンサートでのプログラムは、今のところ、“十八番”のベートーヴェンの七重奏曲だけが決定していますね。
これからメンバーと話し合って、良い構成にしていきたいと思います。

―ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズはこれから、どのようにレパートリーを広げてゆくのでしょうか。
私たちは、何よりも良い室内楽を演奏するグループとして活動していきたい。七〜九重奏をメインにしつつ、メンバーの中から三〜五重奏を構成したり、時にはデュオ、管楽のみの三重奏など、柔軟性を持って取り組みたいと考えています。

―さらに、今後の展望は?
「現代の作品にも、もっと挑戦してみたい」とよく話し合っています。このまま仲良く、そして、どんどん音楽を深めてゆき、室内楽の神髄にもっと触れられるようになれれば、うれしいですね。

フィリップ・トーンドゥル
(オーボエ)

ディルク・アルトマン
(クラリネット)

ハンノ・ドネヴェーグ
(ファゴット)

ヴォルフガング・ヴィプフラー
(ホルン)

2016年度 ティータイムコンサートシリーズ［115］〜［120］

Friday 2 o'clock

フェニックスならではのスペシャル・マチネ。会員通し券なら、1回約2,600円

金曜の午後、上質な音楽をおいしいお菓子・お飲み物と共にお届けするティータイムコンサート。都心に立地し、抜群の交通アクセスで関西一円から多くの皆様においでいただけるホールの特性を生かし、1995年のホール開設以来、お楽しみいただいています。2016年度は6公演。「弦の国」チェコの老舗ピアノトリオ、国内最高峰の弦楽四重奏団に加え、日独の若手スタープレーヤーで構成する室内アンサンブル、日ロの実力派ピアノ。声・姿ともに清新なソプラノの公演も。自信のアーティストがずらり並ぶフェニックスだけの「スペシャル・マチネ」をお楽しみ下さい。

［6公演］
合計額
¥21,000

いずれも金曜日　14:00開演　指定席　お茶・お菓子つき

一般通し券¥19,000　**会員通し券なら¥16,000に。**
（お一人様2席まで）

学生券 各公演 ¥1,000（限定数）

115　戦後天才ピアニストの草分け。ウィーンの音で奏でる、清澄の世界。

深沢亮子 ピアノリサイタル

2016年5月20日（金）
¥3,000（友の会価格¥2,700）

●出演●深沢亮子（ピアノ）

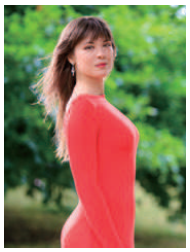
●曲目●
モーツァルト：ソナタ 第10番 ハ長調 K330
原田稔：鬼遊び唄 四題 作品A　ほか（予定）

日本の戦後を音楽家として歩み始め、ウィーン留学後、ジュネーヴ国際音楽コンクールで最高位。オーストリアを軸に活動を展開、日本人作曲家作品を海外に紹介する一方、オーケストラとの共演、室内楽の領域でもキャリアを築く。ウィーンの薫り漂う円熟のピアニスト、久々の関西公演。

116　キエフから、世界の「フェーム」へ。アルゲリッチ絶賛の新星、関西デビュー。

アンナ・フェドロヴァ ピアノリサイタル

2016年6月3日（金）　¥3,000（友の会価格¥2,700）



●出演●アンナ・フェドロヴァ（ピアノ）
●曲目●ショパン：ソナタ 第3番 ロ短調 作品58
ベートーヴェン：ソナタ 第14番 嬰ハ短調「月光」作品27-2
武満徹：遮られない休息　ほか（予定）

ウクライナ出身。2009年、ポーランドのルービンシュタイン国際をはじめ、多数のコンクールで優勝、入賞。アムステルダム・コンセルトヘボウや、パリのサル・コルトーなど名門ホールでのリサイタル、世界のオーケストラとの共演を重ね、マルタ・アルゲリッチから絶賛を受ける。「ライジングスター」の本格舞台。

117　共奏4半世紀。チェコを代表するヴェテラングループが贈る、楽興の時。

プラハ・グァルネリ・トリオ

2016年9月30日（金）　¥4,000（友の会価格¥3,600）

●出演●チェネック・パブリーク（ヴァイオリン）、マレク・イエリエ（チェロ）、イヴァン・クラーンスキー（ピアノ）

●曲目●ブラームス：ピアノ三重奏曲 第1番 ロ長調 作品8
スメタナ：ピアノ三重奏曲 ト短調 作品 15　ほか（予定）

1986年結成、チェコの至宝アンサンブル。グループ名は、ヴァイオリンとチェロの使用がイタリアの名器グァルネリであることに拠る。際立った音質と完璧な合奏、技術の高さによって第一級の室内楽アンサンブルの評価を確立している。今回は、ロマン派の代表的な作品と、故国チェコの名作などを贈る。

118　ドイツの名門楽団員と日本の俊英による、シンフォニックな室内アンサンブル。

交響的室内楽 ―ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ

2016年10月21日（金）　¥4,000（友の会価格¥3,600）

●出演●
白井 圭（ヴァイオリン）、ヤニス・リーバルディス（ヴィオラ）、横坂 源（チェロ）、幣 隆太朗（コントラバス）、フィリップ・トーンドゥル（オーボエ）、ディルク・アルトマン（クラリネット）、ハンノ・ドネヴェーグ（ファゴット）、ヴォルフガング・ヴィプフラー（ホルン）

●曲目●ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 作品20
ほか（予定）

シュトゥットガルト放送交響楽団は、ドイツを代表する名門楽団の一つ。難関ミュンヘン国際コンクールで優勝歴を持つオーボエ奏者をはじめ、管弦の主要奏者と、日欧でキャリアを築く日本の若い弦楽器奏者が、交響楽を思わせる豊饒な響きを奏でる。

119　オペラに、歌曲に。大阪拠点に内外へ翼広げる歌姫の、「心」宿る歌声。

石橋栄実 ソプラノの世界

2016年11月4日（金）　¥3,000（友の会価格¥2,700）

●出演●石橋栄実（ソプラノ）、藤井快哉（ピアノ）

●曲目●
中田喜直：私に歌をください、林光：ほうすけのひよこ
團伊玖磨：歌劇『夕鶴』から
「与ひょう、体を大事にしてね」
プーランク：歌劇『ティレジアスの乳房』から
「いいえ、旦那様」　ほか（予定）

母校大阪音楽大学のザ・カレッジ・オペラハウスや新国立劇場の「沈黙」、大阪国際フェスティバルの「ランスへの旅」（アルベルト・ゼッダ指揮）をはじめとするオペラの舞台を軸に、叙情とパッション溢れる歌唱表現で聴衆を魅了し続けるソプラノ。得意のオペラや日本の多彩なうたを、輝く「華」と共に。ピアノは藤井快哉。

120　ベートーヴェン作品に打ち込んできたJSQの、メモリアルステージ。

Phoenix OSAQA 10年 ―ジャパン・ストリング・クワルテット

2017年3月17日（金）
¥4,000（友の会価格¥3,600）

●出演●
久保陽子（第1ヴァイオリン）、久合田緑（第2ヴァイオリン）、菅沼準二（ヴィオラ）、岩崎洸（チェロ）

●曲目●
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第2番 ト長調 作品18-2
弦楽四重奏曲 第6番 変ロ長調 作品18-6
ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96『アメリカ』
（予定）

1984年の結成以来、「弦楽四重奏の聖典」ベートーヴェンの作品をライフワークに歩んできたJSQ。フェニックスで手掛ける教育・普及事業が10回目を迎える。「節目」に奏でるのは初期の2曲と、何とドヴォルザークの名曲「アメリカ」。ヴェテランならではの滋味溢れる演奏にご期待を。

今回は土曜日の発売となります。

11月21日(土)
10:00 受付開始
ザ・フェニックスホール 友の会優先予約

11月24日(火)
10:00 受付開始
イー・フェニックス E-PHX優先予約

11月25日(水)
10:00
一般発売
インターネット予約、ご来店による
お申込みは11月26日(木)10:00から!

蘇る、いにしえの社交空間。演奏家を囲み楽しむ、ゆったりマチネ日曜版。

速報！

※写真は舞台や客席のイメージです。

新企画コンサート「サンデー・サラウンド・サロン」

19世紀ヨーロッパの、貴族や富裕な商人の邸の客間に設けられた社交空間「サロン」。音楽をはじめとする最新の芸術や科学、新しい政治をはぐくんだ「文化の揺りかご」です。その洗練された優美な趣を今に伝えるザ・フェニックスホール。1階フロアの中央に舞台を設け、お客様がぐるりと取り囲むスペシャル・レイアウトで、室内楽の妙をお楽しみいただきます。出演は、未来の楽壇で中軸を担う気鋭の若手実力派2組。日曜の午後、都心のオシャレな親密スペースならではの極上のひととき。舞台越しに視線を交わせば、あなたもステキな「サロニエール」。

2017年2月19日(日)
14:00開演 指定席
(終演17:00を予定。途中、20分間の休憩がございます。)

座席配置には細心の注意を払っておりますが、
お席によっては演奏家が見えづらいこともございます。
どうかあらかじめ、ご承知おき下さいますよう、お願い致します。

S席：一般¥3,500
(友の会価格¥3,150)
A席：一般¥3,000
(友の会価格¥2,700)
B席：一般¥2,000
(友の会価格¥1,800)
学生¥1,000(限定数)

■ティータイム通し券ご購入の方は、優待価格■
ザ・フェニックスホールの人気シリーズ「ティータイムコンサート2016」の年間通し券をご購入の「友の会」の方は、この「サンデー・サラウンド・サロン」コンサートのチケットが、**2割引**でご購入いただけます(お1人様2枚まで)。ティータイムコンサートを愛して下さる皆様へ、初回限りのお得な特典。この機会に是非お友達もお誘いあわせのうえご来場ください。＊ご決済後の割引適用はできません。

第1部　ザ・ヴィルトゥオーゾ —周防亮介 ヴァイオリンリサイタル

©TAKUMI JUN

出演
周防亮介(ヴァイオリン)、三又瑛子(ピアノ)
曲目
パガニーニ：ロッシーニの「タンクレディ」のアリア
「こんなに胸騒ぎが」による序奏と変奏曲 作品13 MS77
J・S・バッハ：無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第2番 ニ短調 BWV1004
フランク：ヴァイオリンソナタ イ長調　ほか(予定)

第2部 「飛翔」の弦楽四重奏—クァルテット・ベルリン・トウキョウ

©Neda Navaee

出演
守屋剛志(第1ヴァイオリン)、モティ・パヴロフ(第2ヴァイオリン)
杉田恵理(ヴィオラ)、松本瑠衣子(チェロ)
曲目
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第8番 ホ短調
「ラズモフスキー第2番」作品59-2
バルトーク：弦楽四重奏曲 第3番　ほか(予定)

ホール主催・協賛公演・協力チケットのお申込み方法

06-6363-7999
土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約
- ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
- 主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
- 友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約
- E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
- 事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

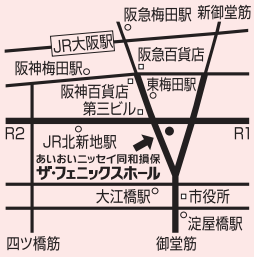
■一般発売
- 一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

http://phoenixhall.jp/
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約 (主催公演のみ)
- ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
- チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
- ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
- 学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
- チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店による お申込み

- ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法
下記①または②のどちらかとなります。

①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。
営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00です。
②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座　00940-0-95351　　加入者名　ザ・フェニックスホール

■フェニックス・エヴォリューションシリーズ76　　主催　アンサンブル・レ・フィギュール事務局

共催公演

2016年5月18日(水)

19:00開演　自由席
一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700)
一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150)
学生前売・当日¥2,000
※友の会割引は1会員2枚まで。

フランソワ・クープラン ～「クラヴサン奏法」出版300年に寄せて～

出演　アンサンブル・レ・フィギュール：高橋美千子(ソプラノ)、榎田摩耶(バロックヴァイオリン)、石橋輝樹(フラウトトラヴェルソ)、原澄子(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、會田賢寿(チェンバロ)

曲目　クープラン：「クラヴサン奏法」よりプレリュード、諸国の人々より「フランス人」、プチモテ 11詩、12詩、13詩、トリオ・ソナタ「リュリ讃」より
リュリ：王の眠りのための音楽　　ランベール：あなたの蔑みは

「私は心に深く語りかける音楽を好む。驚かされる音楽よりも…」(フランソワ・クープラン)
クープランが300年前に出版した「クラヴサン奏法」。この書の中ではクラヴサン演奏法だけではなく、当時の音楽観や様式についても多く語られています。彼はヴェルサイユ王立礼拝堂のオルガン奏者としてフランスの伝統的な宗教曲モテを数多く生み出しました。1715年ルイ14世死後、フランスにイタリア様式が急激に入り、クープランもイタリア様式(ソナタ)とフランス様式(組曲)の混合した作品「諸国の人々」を作曲します。今回は宗教曲と、様式の融合の2つをテーマにクープランの人生を辿ります。また、クープランはリュリを敬愛していました。そのリュリと共に作曲活動をしていたのがランベールです。この3人の共通点は同じ王のために作曲していた点です。クープランと共にリュリ、ランベールの作品を聞くことによりフランス音楽の美意識を感じ取って頂ける演奏会となっています。

アンサンブル・レ・フィギュール(Ensemble Les Figures)
日本そしてヨーロッパでバロック音楽の専門教育を受けた、パリ在住のメンバーが集まりフランスバロック音楽を中心とするアンサンブルを立ち上げました。バロック時代の音楽では音楽そのものより、言葉を音楽に乗せ『語る』という修辞法をもって人々の心に訴え掛ける事が大切でした。『フィギュール』とはまさに、その語りをより良くさせるための『装飾』の事です。アンサンブル・レ・フィギュールは声楽と器楽で構成されたアンサンブルで『語りかける音楽』を大切にし、テーマ性をもった演奏会をしています。バロック期の作品への理解と対話、趣味とスタイルを理解することにより、300年以上も前に作られた作品がどの様に奏でられ、どれほど素晴らしかったのかを観客の皆様と一緒に共感できれば幸いです。

フェニックス・エヴォリューション・シリーズは、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社の芸術文化支援活動の一つです。同社が運営するあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール(大阪・梅田)での公演企画を公募、審査で選ばれた方にホールと付帯設備を無料で貸与致します。

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛・協力公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演

トリオ・ダマーズ　Trio Damase
「フランス音楽のエッセンス」(L'essence de la musique française)

主催　トリオ・ダマーズ

12/1(火)発売

2016年2月20日(土)　14:00開演　自由席　一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700)　一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150)　学生¥1,000

出演　清水信貴(フルート)
小峰航一(ヴィオラ)
松村衣里(ハープ)

曲目　ダマーズ：トリオ
ドビュッシー：ソナタ
ジョリヴェ：小組曲　ほか

近代フランス音楽を象徴するかのような、ドビュッシーの晩年の傑作「フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ」。この名作によってそれ以降フランスの近現代の作曲家は様々な作品をこの編成で書いています。中でも我々トリオの名前ともなっている作曲家ダマーズ氏のトリオは、フランス音楽の豊潤な響きを持つ傑作です。トリオの他ソロ、デュオも組み合わせたフレンチ室内楽をお楽しみください！

協賛公演

オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ　クラシック・アンサンブル室内楽の調べ

主催　一般社団法人大阪市音楽団

発売中

2016年3月6日(日)　14:00開演　指定席　一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700)　学生前売¥2,500　一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150)　学生当日¥3,000

出演　オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ・メンバー
曲目
A・アルビージ：小組曲第2番より第1楽章、第4楽章【フルート三重奏】
A・デザンクロ：サクソフォン四重奏曲【サクソフォン四重奏】
H・G・ブロッドマン：ハーマンへの挨拶【打楽器四重奏】
ベートーヴェン：管楽八重奏曲 変ホ長調 作品103【木管八重奏】
ヘンデル(エルガー・ハワース編)：
「王宮の花火の音楽」より【金管アンサンブル】 ほか

オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラが贈るアンサンブルコンサート！普段は吹奏楽を演奏しているメンバーですが、今回は新たな可能性を追い求め全てアンサンブル(室内楽)プログラムでのコンサートとなっております。普段磨きこんだ鋭い感覚と、息の合ったアンサンブルをベートーヴェンやヘンデルのクラシックの名曲やオリジナルの楽曲にのせてお贈り致します。吹奏楽とは一味違う、色彩感豊かな音楽の世界をお楽しみください。

協力公演

非破壊検査ニューイヤーコンサート2016 ローマ春のセレナーデ

主催　読売テレビ

発売中

2016年1月7日(木)　19:00開演　指定席　S席(1階席)¥7,000(友の会¥6,300)　A席(2階席)¥5,000(友の会¥4,500)　※S席のご購入はお一人様4枚まで。
1階席は丸テーブルでワインを飲みながらお楽しみいただけます。2階席は開演前と休憩時にロビーでワインを楽しんでいただけます。

出演　ロザーリア・ブシェーミ、辰巳真理恵(以上ソプラノ)
高田正人(テノール)
アヴォス・ピアノ・カルテット(ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)

曲目　シュトラウスⅡ：オペレッタ「こうもり」より 序曲
グノー：歌劇「ロメオとジュリエット」より "私は夢に生きたい"
プッチーニ：歌劇「ジャンニ・スキッキ」より "私のお父さん"
ヴェルディ：歌劇「ラ・トラヴィアータ(椿姫)」より "ファンタジア"　ほか

編曲の創意　魅する物語へ

「無伴奏ヴィオラリサイタル」に寄せて　ウェンティン・カン

1月29日(金)ティータイムコンサートで初登場となる中国人ヴィオラ奏者、ウェンティン・カンさんより「無伴奏ヴィオラリサイタル」に向けてメッセージを寄せて頂きました。(翻訳:株式会社テレビマンユニオン)

近年、ソロ楽器としての演奏がよく聴かれるようになったヴィオラ。その特別な声を持つ楽器の演奏に対する奏者の責任は重大です。このたび、すばらしいヴィオラ奏者であり、私の尊敬する師である、今井信子氏の監修するコンサートシリーズで演奏させていただくことを心より光栄なことと感謝しています。

私が今井先生にお会いしたのは、2012年の第2回東京国際ヴィオラコンクールでした。この東京国際ヴィオラコンクールは、今井先生の提唱で24年前に発足して以来、毎年開催されているヴィオラの祭典「ヴィオラスペース」から生まれたコンクールです。コンクール優勝の副賞として、次年以降のヴィオラスペースへの出演が叶い、参加させていただいていますが、毎回、音楽を創り上げていく中で新しい発見に出会い、それはとても美しい音楽のひらめきの時となっています。また、大阪はヴィオラスペースの開催地としてとても重要な都市のひとつです。

2012年以降、今井先生とはさまざまな場所でお会いし、また、室内楽で共演をさせていただいています。2013年～2015年にかけてはクロンベルク・アカデミーで、先生に師事していました。私にとって今井先生は、ヴィオラの音楽や演奏法だけではなく、より豊かで偉大な人間になるための人生の師でもあります。それはそれは、さまざまなことについて、数え切れないほどの質問や疑問を先生に相談しました。そのたびに先生は、とても丁寧に、その場限りではなく、とても長い目で将来を見据えた答えで、私を勇気づけてくれています。今井先生には周りにいる人すべてに前向きで真摯な力を与える力があります。このたび、スペインのマドリッドで先生のアシスタントを務めることになりましたが、ご一緒できることを今からとても楽しみにしています。

今回のリサイタルでは、“めずらしい編曲からのインスピレーション”をテーマに選びました。このプログラムでヴィオラはさまざまな角度から、違った音色で奏でる“物語”を表現しています。

ゲオルク・フィリップ・テレマンはJ・S・バッハと同じ時代に生きた、ドイツの作曲家です。テレマンは12曲のファンタジーをヴァイオリンの独奏曲として作曲しました。その中から、今回私は、第5番ニ長調、第1番変ホ長調、第7番変イ長調を選びました。第5番は暖かさと大胆な若さの力に満ち溢れていますが、曲の半ば、アンダンテの箇所ではわずかな静寂が訪れます。第1番はゆったりとしたラルゴで始まり、グラーヴェで重々しく奏でられる平行短調の中間部のアレグロに移ります。その後、変ロ長調の明るいエンディングで第1番は終結します。今度は、デザートのような甘くて優しい第7番が慰めに満ちた変ホ長調で始まります。この曲は緩急のコントラストが鮮明な4楽章から成っています。

テレマンのファンタジーで幕を開けた後は、ヨハン・セバスチャン・バッハの6つの無伴奏ヴァイオリン・ソナタより、ソナタ第1番とパルティータ第1番の2曲が続きます。同じバッハの無伴奏チェロ組曲はヴィオラでよく演奏される曲ですが、今回のヴァイオリン無伴奏ソナタとパルティータはかなりの難曲で、これを演奏するのはひとつの挑戦です。ですが、同時にバッハの音楽の別の側面をみせてくれるこの2曲を選び、今回の演奏会で演奏することは非常に価値のあることだと信じています。ソナタ第1番ハ短調はアダージョ、フーガ、シチリアーナ、プレストで演奏されます。アダージョは即興的なメロディ・ラインが非常に創造的で色調豊かな和音進行の中に築かれています。フーガではバッハが優れた音楽の建築家であったことが証明されています。限りない可能性を持ったハーモニーがその楽章に限りない深みと高さをもたらします。イタリアの伝統的なダンス、シチリアーナは曲の中でも、穏やかな楽章です。その後に続く軽快ながらも情熱的なプレストはヴィルトゥオーゾの響きをもって、曲を終わりに持っていきます。

パルティータの第1番は、ヨーロッパの伝統的な舞曲から構成されています。すべての舞曲にそれぞれのバリエーションの特徴に沿った“ドゥーブル(変奏)”が用いられています。この変奏は舞曲の正確な和音進行に従って進められますが、リズムは様々に変化します。パルティータはすべて独自のスタイルで構成されるものですが、なかでもこの第1番はドゥーブルを用いた唯一の作品です。

イギリスの作曲家、ベンジャミン・ブリテンは3つの無伴奏チェロ組曲をムスティスラフ・ロストロポーヴィチの為に書いています。第1番作品72は9つの楽章から成り、2楽章ごと、4箇所に“カント(歌)”が挿入されています。“カント”ではブリテンは弦楽器の特性を生かした、ピッツィカートやコルレーニョ(弓の木部で弦をたたく奏法)などさまざまな効果を入れています。この音楽的な効果によって、曲はより色彩を帯び、創造性を伴った、とても興味深いものになっています。これはブリテンの作曲する弦楽曲の優れた特徴といえます。この曲を編曲し、ブリテンの新たな声を発見させてくださった今井先生に感謝します。

ヴィオラという楽器の魅力を存分に楽しんでいただけるプログラムになりました。会場で皆様にお会いできますことをとても楽しみにしています。

ウェンティン・カン (Wenting Kang /ヴィオラ)
第2回東京国際ヴィオラコンクール(2012)優勝。そのほか国際的なコンクールで優勝を飾る。ヴェルビエ、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭など国際的な音楽祭に参加。室内楽奏者として、今井信子、ピーター・ワイリーなど、数々の世界的な演奏家と共演している。ニューイングランド音楽院でノックス、カシュカシアンに、クロンベルク・アカデミーで今井信子に師事。今秋より、マドリッドにて、今井信子のアシスタントを勤める。

「ウェンティン・カン 無伴奏ヴィオラリサイタル」は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザーの今井信子(ヴィオラ奏者)プロデュース公演。2016年1月29日(金)午後2時開演。入場料2,000円(指定席)、友の会1,800円。学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時～17時)。

[プログラム]
テレマン:無伴奏ヴィオラのための12の幻想曲から第5番 ニ長調 TWV40:18、第1番 変ホ長調 TWV40:14、第7番 変イ長調 TWV40:20(原曲:無伴奏ヴァイオリンのための12の幻想曲から第5番 イ長調 TWV40:18、第1番 変ロ長調、第7番 変ホ長調 TWV40:20)
J・S・バッハ:無伴奏ヴィオラ・ソナタ 第1番 ハ短調 BWV1001(原曲:無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番 ト短調 BWV1001)
J・S・バッハ:無伴奏ヴィオラ・パルティータ 第1番 ホ短調 BWV1002(原曲:無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第1番 ロ短調 BWV1002)
ブリテン(今井信子編):無伴奏ヴィオラ組曲 第1番(原曲:無伴奏チェロ組曲 第1番 作品72)

企業の芸術文化支援に目を凝らす「叩き上げ」企業メセナ協議会専務理事 加藤種男さん

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの開館は1995年春。このころ日本は、「空前の好景気」と呼ばれた80年代後半のバブル経済の影響の下、多数の企業が芸術文化支援（メセナ）活動に取り組み始めていた。活動の活性化や支援を目的に「企業メセナ協議会」（＊1）が設立されたのは90年。協会はその後、4半世紀にわたってメセナ活動の社会的な意味を発信し、芸術文化の振興を促してきた。専務理事の加藤種男さんは長くアサヒビール株式会社でメセナに携わり、多彩な事業を企画・制作すると共に、全国各地の市民主導アートプロジェクトを支援、また芸術文化による地域つくりにも視線を注いできた。さらに自治体や国の文化政策にも参画するなど、今も東奔西走。実理豊か、機微に富んだ「ミスター・メセナ」に自身の歩み、現代におけるメセナの意味付けなどを聴いた。

（取材・構成：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール　谷本裕）

世界的アコーディオン奏者・御喜美江さん（右から2人目）とリコーダーで共演（左から2人目）＝第76回アサヒビールロビーコンサート「秋風はたんぽぽ畑をわたる」の舞台。2003年9月、東京・墨田区吾妻橋。

長く金属加工会社に勤めておられたそうですね。アサヒビールでメセナ活動に携わる契機は。

40歳を過ぎた頃、知り合いに樋口廣太郎社長（＊2）を紹介されたんです。会社に調査部をつくる。来てもいいと言われた。僕は元々、法律畑の人間。内外の政治や経済の動きを企業活動に活かすのは面白いと考え、就職しました。1990年です。ところが入社すると、立ち上げるのは企業文化部（現・社会環境推進部）で、「文化をやれ」という。父はアマチュアのバッハ研究家で大晦日に《マタイ受難曲》を歌うような家で僕は育った。芸術文化に関心が強く、社会人になってからも盛んに見たり聴いたり。根がキライじゃない。乗り気になりました。

社内にネットワーク

仕事の中身は。

何も決まっていなかった。半年ほどすることがない。樋口さんに尋ねても「バカヤロー。何やるか考えるのが仕事だろ」と一喝です。人事部長に相談し、自己研修名目で各地の自社工場を巡り、生ビールを御馳走になったり、監査役にくっ付いて営業所を訪ねては仕事の様子を聴いたり。東京に居る時も伝手を求め、若手社員の会に顔を出す。中堅幹部研修に加わる。お昼時は、ある幹部がお茶飲みで立ち寄る場所に通い「ウチの株価はなぜ上がる」「若い時代の営業の失敗談」「部下の叱り方」など、日替わり〝講座〟を拝聴しました。途中入社ですから企業風土を理解するように努めつつ、メセナに取り組もうと考えたんです。「企業」、「組織」や「経営」を知る上で勉強になりました。

90年暮れに、「ロビーコンサート」を始めました。

公演づくりは右も左も分からず弱りましたが、その頃、外で聴いたコンサートが面白かった。プロデュースした音楽研究家に頼み込み、知恵袋になっていただいた。初舞台は12月21日。東京少年少女合唱隊にクリスマスソングやキャロルを歌ってもらいました。他の専門家もアドバイザーに請い、アイデアをいただいて企画・制作する体制を整えた。場所は最初、墨田区吾妻橋の本社ビルロビーだけでしたが、巡り回った工場や、営業拠点のある町の施設にも広げ、200回を超えています。

珍しい民族音楽や現代音楽などが頻繁に取り上げられています。

初回も、北欧や中南米などのちょっと変わったクリスマスソングを歌ってもらったんです。当時も今

かとう・たねお　1948年兵庫県生まれ。90年アサヒビール株式会社の企業文化部新設に合わせ入社、課長となる。98年環境文化推進部エグゼクティブプロデューサー。2002年からアサヒビール芸術文化財団事務局長。アサヒ・アート・フェスティバル、アサヒビール大山崎山荘美術館（京都府大山崎町）、すみだ川アートプロジェクトなど、同社のメセナ活動のほぼすべてに関わる。10年から企業メセナ協議会理事、12年から同専務理事。04年から10年まで横浜市芸術文化振興財団専務理事兼事務局長。また10年から東京都歴史文化財団エグゼクティブ・アドバイザー、国の文化審議会政策部会委員、11年から京都造形芸術大学客員教授などを歴任。日本NPOセンター評議員、アートNPOリンク理事、おおさか創造千島財団理事、さいたまトリエンナーレ2016総合アドバイザーとしても文化振興に寄与。2008年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。著書に、『地域を変えるソフトパワー』、『新訂アーツ・マネジメント』(いずれも共著)ほか。

「ブランド」確立へ貢献を

も、ホールの多くは在京の音楽事務所がお抱えのアーティストで組んだパッケージ企画をそのまま舞台に載せることが少なくない。ヨソと同じか、似た内容になる。公演専用施設ではないロビーでそれをやっても、演奏家の士気も上がらず、埋没しかねない。樋口さんはヒット商品「スーパードライ」を発売した社長。経営方針に「人のマネはしない」を掲げるほど独自性を重んじ、メセナにも「手作り」や「発明」を求めた（＊3）。「営業が稼いだ大切なカネを使うんだ。他とは違う『挑戦』が出来ないなら、文化をやる意味はない。考えられないヤツは、明日から来るな」とハッパをかけられた。

「継続の危機」越えて

同じ本社で地元・隅田川流域の歴史や人材、自然に着目した夏の芸術祭（すみだ川アートプロジェクト）を毎夏、開いたり、大山崎山荘美術館（京都府大山崎町。96年開設）の運営に携わったり、全国の市民やアートNPO（特定非営利活動法人）と協働してアートの祭りをつくる「アサヒ・アート・フェスティバル」立ち上げるなど、順調にメセナ活動を拡げてこられたんですね。

いえいえ。「危機」もあったんですよ。仕事を始めて10年経った2000年、担当役員から問われた。「キミらのやってることは、我々からほとんど見えない。活動が『点』に終わってるんじゃないか。意味が薄いし、メセナを続ける意義をしっかり説明してくれ」。スタッフと議論を重ねて考え、民間シンクタンクに業務分析を委託もしました。活動の検証はもちろん、社長や担当役員から要望を聴き取ってもらう。現場の取り組みと経営陣の考えが一致していないことが分かってきた。シンクタンクのまとめは、こうです。現場は芸術文化の活動や支援を通じ、社会とコミュニケーションを取ってきた。メセナ活動の究極の目標はそれを通じた企業のブランド向上への寄与にある―。私たちも役員も、納得できる結論でした。

「企業ブランド」とは。

個別商品のブランドと違い、幅広い社会的評価が得られて初めて成立する経営資源。そのためには社会に何が必要かを見極め、事業を立案しなくてはなりません。幸い私たちは90年代から、音楽を含む幅広い芸術文化の力で地域を切り拓こうとする市民・団体に助成もしてきました。これを念頭に、社会とのやり取り、「双方向の関係」の大切さを見つめ直し、自分たちしかできない、しかも会社のイメージを上げるメセナ活動を探った。そして構想したのが、「アサヒ・アート・ネットワーク」（＊4）。点在する取り組みを緩やかに繋げ、各々が蓄積した情報や企画・制作ノウハウを共有してもらう。点が線になり、面にもなる。それは「市民社会の実現」を促す営み。企画書を経営会議で提案・説明し、やっと認めてもらえた。

修羅場でしたね。

メセナ協議会の運営にも携わるようになり、他社の事例にも接し分かってきたのは、社長や担当役員が代わる度、メセナの意味が問い直される例は少なくないということ。ただ多くの場合、取締役全員がそう考えている訳でない。活動を問題視する側にも正当な問題意識があり、内心は行方を気に掛け、何か筋の通った説得を求めていたりもする。彼らが納得する、社会的な意味のある理念や具体的な事業プランを担当部から発案し、理解や認知をもらうことが、安定したメセナ活動には有効だと言い続けてきました。

「アートの現場」にいざ自転車で＝「瀬戸内国際芸術祭」で。2013年8月、香川・小豆島

芸術文化の力に開眼

「節目」を境に加藤さんの動きも変わりましたか。

『未来・市民・地域』をメセナのキーワードに定め、地域のイベントに招かれたら、必ず出席するようにしたんです。出張先での宿泊が、年100日を超すこともあり、キツかったですが、市井の人々が芸術や文化を通し、地元の文化資源を見直したり、人と人との対話や絆を取り戻したり。子どもや障がい者の表現力を引き出す、住民同士の多様性を認め合う。地道な営み、真摯な思いに触れる中で、単に純粋な、審美的な意味での芸術性に留まらない芸術文化の「力」に、目を啓かれました。

今は日本経済全体が減速し、企業を取り巻く環境もなかなか厳しい。そんな中でのメセナ活動の意味合いをどう考えれば良いでしょうか。

アーティストやクリエーターは、社会で最も先端的な考えを持ち、世の動きに最も敏感な人々。しかも、その多くは頼まれなくても自ら表現をしてくれる。メセナは、企業としてそうした表現に目を向け、社員が彼らと触れ合うためのコミュニケーションツール。協働の中に必ず、未来のビジネスの可能性があると私は考えています。商品にせよサービスにせよ、「新しさ」を創造しなくてはならないのは企業も同じ。他社に先んじるヒントを見い出せるなら、メセナの意義も大きいですよね。ただ、現代の企業は概ね、「大量生産・大量消費の経済」を実践している。つまり万人が皆、同じ商品やサービスを購入する図式のビジネスで成り立っています。芸術や文化はそうじゃない。アーティストは他者と異なる、オンリーワンの作品やパフォーマンスを志向する。こうした人々と共生するには、企業の側も立ち止まって考えることが必要になる。時に「摩擦」が起きるのもやむを得ないですが、「衝突のプロセス」にこそチャンスやヒントが宿っているかもしれない。

「これから」のメセナの展望は。

20年の東京五輪に向け、来秋ごろから「企業ブランドを芸術や文化でつくりたい」というケースが相次ぐでしょう。スポーツ支援をする企業も多いかもしれませんが、費用対効果で見ればメセナの方が手掛けやすい。資生堂やサントリー、かつてのセゾングループといった大企業が、それによって大きなブランド力を手に入れてきました。近年は「中村ブレイス」（島根県大田市大森町）や「たねや」（滋賀県近江八幡市）、「六花亭製菓」（北海道帯広市）など、地方の企業が行うメセナが「民主導の文化政策」と呼べるような成果を挙げ、注目されています。投資効果を高めるのに、様々な内部議論が不可欠ですし、コンサルタントを入れる場面もあるかもしれません。メセナで企業ブランドをいかに確立できるか、新旧問わず、知恵比べの時代になるだろうと思っています。

＊1　企業メセナ協議会 企業による芸術文化支援（メセナ）活動の活性化を目指し1990年に設立された、我が国唯一の中間支援機関（公益社団法人）。メセナの社会的な意義を発信し、文化振興の基盤を整えるための調査研究や顕彰、助成、コンサルティングや国際交流などに取り組む。会長・高嶋達佳（電通会長）、理事長・尾崎元規（花王顧問）。正・準合わせ約200社・団体の会員を持つ。事務局：東京都港区芝。

＊2　樋口廣太郎（1926-2012）京都市出身。京大経済学部から住友銀行入り。86年、副頭取からアサヒビール社長となり、翌87年スーパードライを発売し、大ヒット。同社の中興の祖と呼ばれた。経団連副会長や、首相の諮問機関、経済戦略会議で議長なども務めた。

＊3　アサヒロビーコンサート ①企画・運営は社員手作り②地域のお客様に気軽に楽しんでもらえる③アーティストらと共々、現代音楽や民族音楽など珍しい音楽を独自に組み立てる④地域のアートNPO（特定非営利活動法人）や市民グループなどとのパートナーシップで企画運営する―などが特徴（同社HPによる）。入場無料。

＊4　アサヒ・アート・ネットワーク 市民がアートの力で地域の未来を切り拓こうとするプロジェクトのネットワーク。2001年に全国の市民グループやアートNPO、アサヒビールなどが立ち上げた。2002年から「アサヒ・アート・フェスティバル」（AAF）を主催。現在は全国やアジアとのネットワークをつくり、議論を深める講座やカフェ、実践的なアートマネジメントを教える「AAF学校」、データベースを活用したアーカイブづくりや活動の検証手法の開発など、通年にわたり多彩な活動を展開。月1回の定例会議やメーリングリスト、全国から参加者が結集する拡大実行委員会などで交流を続けている。2012年4月、アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会から改称した。

Homage

奏者と観客が作り上げる空間

片岡 リサ

大阪音楽大学卒業、大阪大学大学院修了。皇太子殿下・秋篠宮殿下御前演奏をはじめ、平成13年度文化庁芸術祭新人賞を史上最年少で受賞、第21回 出光音楽賞、平成22年度 咲くやこの花賞、平成22年度大阪文化祭賞など多数受賞。またオーケストラとの協演や洋楽器とのアンサンブルを積極的に行うだけでなく、「歌」にも定評があり、伝統音楽の枠を超えた音楽性が様々なジャンルで高く評価されている。現在、大阪大学大学院文学研究科(音楽学)博士後期課程在学中。大阪音楽大学、同志社女子大学、兵庫教育大学講師、宮城社師範。www.risakoto.com

1995年といえば、つい最近のような気がします。ザ・フェニックスホールが開館20周年を迎えるということは、私も20年の歳を重ねたということですね。私がザ・フェニックスホールの舞台に初めて立ったのは、1997年10月3日、大阪音楽大学付属楽器博物館(現・音楽博物館)の創設30周年記念レクチャーコンサート「日本の調べ」においてでした。当時私は大阪音楽大学箏専攻(現在は邦楽専攻)の2年生で(嗚呼、年齢がバレてしまう…)、先生方とご一緒であったこともあり、かなり緊張していたことを覚えています。若い記憶ながら、箏の弦を弾いた瞬間ふわ〜っと音が舞い、ホール中に音が響きわたった感動は今も忘れられません。そして終曲の時に、今では名物にもなっている舞台後ろの壁が上がり、夜の御堂筋を走る車のライトアップにお客様からもため息がこぼれましたが、奏者である私も非常に驚きました。

演奏家は全国、いや世界のいろんな場所に行って演奏します。私も大学在学中や卒業してからもお陰様でたくさんの場で演奏させていただいていますが、その中でも音響のこと(よく響く・響かない)、建物全体について(設計が素敵・楽屋から舞台が遠い)、客席数やお客様の雰囲気など、さまざまな要因で印象に残りやすい会場があります。ザ・フェニックスホールは、音響の良さや壁の演出だけでなく、お客様との距離が近く、お客様も奏者も素晴らしい響きの中でアットホームな空間を作り上げることが出来る、全国でも有数なホールとして演奏家に素晴らしい印象を与えているのではないでしょうか。記憶だけでなく耳にも目にも残るコンサートホールは、一度演奏すると、またここで演奏したい気持ちになります。これが、世界の演奏家達がザ・フェニックスホールを好きな所以でしょう。私もその中のひとりです。

さて、私は大阪音楽大学卒業後、演奏活動を続けてまいりましたが、フェニックスホールとは節目節目でご縁があるのです。2010年に東京オペラシティ文化財団主催の「B→C」というコンサートシリーズに出演しましたが、これは「バッハからコンテンポラリーまで」がテーマで、箏奏者としてはこのシリーズ初登場でした。箏でバッハ!?もちろんそれまでに箏でバッハを演奏したことがある人はいたかもしれません。しかし私は、先人と同じことをしても意味がないと思い、箏だけでなく歌(ベルカント唱法による洋楽発声)を弾きながら歌う私の演奏スタイルを取り入れ、箏の弾き歌いでバッハのカンタータを演奏しました。ご存知のとおりバッハのカンタータは教会音楽ですので、教会のように響きの良い会場での演奏が適していると思います。東京では主催である東京オペラシティで、そして私の地元・大阪でも公演を行うことになり、フェニックスホールが協賛となり、あのホールの響きの中でバッハを弾き、歌いました。そして、この大阪公演の成果により、この年の大阪文化祭賞を受賞しました!

もうひとつは、一昨年に日本の箏と韓国のカヤグムを中心にした日韓の伝統音楽公演をフェニックスホールで行ったことです。演奏活動と並行して、学問として音楽を広く学びたいと一念発起し、大阪大学大学院の文学研究科の中にある音楽学専攻を受験し入学しました。大学院での私の研究テーマが「日韓の伝統音楽比較」で伝統音楽周辺のさまざまな事柄を比較し、今年1月に修士論文を提出、無事3月に修了いたしました。日韓の伝統音楽は、世間一般からは敷居が高いと思われていること、普段なかなか耳にする機会がないことなど状況がとてもよく似ています。楽器においても、箏(日本)とカヤグム(韓国)は弦の数も13本と12本、横に長い弦楽器(胴長ロングツィター)で奏法にも共通点があります。しかしその音色はお互いの国の情感を如実に表していて、伝統楽器の中の代表的であり特徴的なこの2つの楽器を、一夜にして目で見て耳で聞くコンサートを行いました。韓国・釜山からカヤグム奏者を招き、私は演奏だけでなく、司会者として進行の中で曲の解説も行い、当日配布のプログラムにも楽器の紹介を入れるなど、予備知識がなくても楽しくよくわかるコンサートを心がけました。

これらの公演や大学院での研究を通して、演奏家として自国の楽器や音楽をどう伝えていくべきかを再認識しました。そして伝統音楽に携わる奏者として、箏の良さや素晴らしさを伝え普及していくためには、よい演奏をするだけでなく、誰もがよく知っている楽器ではないからこそ、演奏では補えないものを文字や口頭で説明する必要があると感じました。フェニックスホールは、舞台上で話す時も、マイクを使わずとも声が客席に通ります。また、前述したように観客と奏者との間に独特の良い雰囲気を作り上げやすく、音響的にも空間的にも、レクチャー付きのコンサートに十分対応できるホールです。これからフェニックスホールで行うコンサートは、多岐にわたる幅広い内容になっていくのではないでしょうか。

日韓の伝統音楽の比較を行った時、韓国は日本よりも国家的に伝統音楽保護を積極的に行っています。また国や各地方において国立・市立(道立)の伝統楽器オーケストラが設立され、定期演奏会が各地で行われています。伝統音楽公演は、圧倒的に韓国の方が行いやすい傾向にあるように思います。ザ・フェニックスホールは開館20周年を迎えられ、名実ともに日本でもトップクラスの素晴らしいホールであることが周知されている今、ぜひ伝統音楽の公演にも力を入れていただき、大阪の、関西の文化力を引っ張っていく力強い存在であってほしいと願っています。そして、洋楽・邦楽の境界線を感じさせないフェニックスホールの舞台で、箏曲の可能性を引き出せる演奏にこれからもチャレンジしていきたいと思っています。

(かたおか・りさ=箏奏者)

Gallery

『シンボルマーク』

当ホールのシンボルマークは、日本を代表するグラフィックデザイナー:亀倉雄策氏の作品です。彼は、1964年東京オリンピックのエンブレム作者でした。

1995年の開館時に作成された記念冊子には、【「ザ・フェニックスホール」誕生にあわせてシンボルマークの依頼がありました。〜中略〜洗練された雰囲気の素晴らしさを望んでいらっしゃるように感じました。〜中略〜やはり名前の通りフェニックス「不死鳥」という鳥に的を絞ってアイデアを練りました。〜中略〜果たして小粋な音楽ホールといった感じがでたかどうかは、意外と作者にはわからないのです。なにしろ自分では良く出来たと思っていますから…。 】という亀倉氏の微笑ましいメッセージが寄せられています。

このマークは、正面玄関をはじめ、自主企画公演チラシ、チケット台紙に封筒、ホール内の案内板など、各所に登場いたします。私どもにとってはもちろんのこと、皆様の目にもいつも触れている大事な目印です。

企業や団体のシンボルマークには、親しみや信頼を増す効果があるとされています。開館からの20年を振り返る中で、積み上げられた歴史と、皆様からの信頼を改めて認識し、この素敵なマークとともに、大切に引き継ぎ、30年目、40年目に向けてより良いホール環境作りと新たな試みを続けたいと思います。

Venues for Chamber Music

室内楽ホールを巡るシリーズ第3回。引き続き、在京の〝遊撃手的存在〟とも言われる機動性に長じた「Hakuju Hall」と、北海道の菓子メーカー六花亭が札幌に7月開いた「ふきのとう」ホールを紹介しよう。

HAKUJU HALL

設置者：株式会社白寿生科学研究所
所在地：東京都渋谷区富ヶ谷1-37-5
電話：03-5478-8867　座席数：300席

こんにちは！室内楽ホール
❹東京編

©Albert Abut 写真 Nacása & Partners Inc.

設置・運営会社はヘルスケア機器・食品メーカー。外部主催者との共催も含め、ホールが主体的に手掛ける事業は90を超す。本格派演奏家を1時間で楽しむ「ワンダフルoneアワー」、向山佳絵子さん・長谷川陽子さんという実力派2人の企画する「チェロ・コレクション」、音楽と異ジャンルのアートのコラボ企画「アート×アート×アート」などを展開中。日本人アーティストの積極起用で特色つくりを図っている。

はら・ひろゆき 1971年、東京都生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。都銀勤務後、98年に株式会社白寿生科学研究所に入社。現在、取締役副社長とHakuju Hallの支配人を兼務。クラシック音楽への造詣が深く、自らもヴァイオリンを演奏。慶應義塾大学OBを中心に結成された「アマデウス・ソサイエティー管弦楽団」の運営にも携わっている。

アーティストと企画手作り　ホール支配人 原 浩之さん

開設は2003年。本社移転が契機です。私たちは本業で健康づくりを目指しており「ゆとりの精神」もキーワード。これに沿う施設を社屋に造れば、お得意様はじめ多くの人に出会いを提供でき、知名度向上にも役立つ。そんな場としてクラシック専用ホールを構想しました。僕は学生時代、オーケストラに所属し、OB楽団の運営に携わり、クラシック音楽への想いは強かった。音楽業界の仲間に相談すると、何と全員反対。「億単位の赤字」「辛いだけ」と言われ、「じゃ、ナンデその仕事を続けてるの」という反骨精神が働いた。折良く、建築物に公共性の高い公開空間を確保すれば容積率が上がる渋谷区初の総合設計制度の適用第一号に。社長の許可も得ました。

都内では多くの小ホールが主催事業を行っており、「他に出来ない公演」を考えた。外部プロデューサーを交え発案したのが「リクライニング・コンサート」。ゆったり手足を伸ばせる特製椅子を活用、背もたれを完全に倒すため、席数は定員の半分に限定。チケット1,500円。1時間公演。「高い・長い・眠ってはダメ」という慣行を覆す試みです。毎回売り切れ、新聞では文化欄でなく社会面に、専門誌でなく一般女性誌に取り上げられファンが広がった。

ギターの荘村清志さん・福田進一さんによる「ギター・フェスタ」は06年から。2人の顔合わせはそれまでほとんど無かった。打ち上げでのおしゃべりが発端。歴史は夜、つくられる。フェスタは今年10回の節目。デュオCDも出た。お蔭様で「ギターのハクジュ」とも言ってもらえるようになりました。

「他館との差異化」戦略は限界もあり、近年は模索続き。小ぶりだからこそ実験的企画も可能、演奏家の実力が明確に出る音響特性ーなど自館の個性を活かす方向に発想を替え、昨年から改革を進めています。アーティスト共々手づくりする公演を、大切に考える。事業数は倍以上増え、リハも全て立ち会うのでスタッフは大忙し。僕は本業の副社長との兼務で忙しく、アクロバットみたいな毎日ですが、「面白いことやってるネ」と言われるような、斬新な企画を打ち出していきたいです。

ふきのとうホール

設置者：六花亭製菓株式会社
所在地：札幌市中央区北4条西6丁目3-3
電話：0120-12-6666　座席数221席

こんにちは！室内楽ホール
❺札幌編

本社所在地は帯広市。北海道を代表する菓子メーカーとして全国に知られる。音楽の他にも美術館の設置・運営、児童詩誌発行など文化活動に積極的で、企業メセナ協議会の「メセナアワード」で受賞を重ねるなど社会貢献活動の評価も高い。ふきのとうホールは今年7月オープンの札幌本店に併設。柿落としはウィーンフィルのコンサートマスター、ライナー・ホーネックと神戸市室内合奏団の公演。主催公演は年約50回を予定。

おだ・ゆたか 1947年帯広千秋庵（現・六花亭製菓）社長・小田豊四郎氏の長男として北海道帯広市に生まれる。69年慶應義塾大学商学部卒業後、京都の老舗菓子匠・鶴屋吉信で修業。72年帯広千秋庵に副社長として入り、95年六花亭製菓代表取締役。2015年渋沢栄一賞受賞。食文化発展を目指すNPO法人「小田豊四郎記念基金」理事長。

欧州で感じた「憧れ」人々に　六花亭製菓社長 小田 豊さん

お菓子屋がホールをつくる。不思議な取り合わせに思われるかもしれません。音楽との縁は30年もさかのぼります。原風景は広島。「バッケンモーツァルト」という御同業の店に行った時です。広島交響楽団の楽員が室内楽を演奏し、それを聴きながら、お客様が召し上がっている。素朴に「良いな」と思いました。

創業50年の1982年、帯広で「デセールコンサート」を始めました。最初は札幌交響楽団の楽員に出演を請い、間もなく東京の演奏家を招くように。87年には「帯広ひろびろ音楽祭」も立ち上げました。経済人や医師、ピアノ教師ら地域の人々と実行委員会をつくり、毎夏、町のあちこちで室内楽公演を開く。盛況でしたが、残念ながら聴衆が固定化し、広がらない。10回を機に地元の芸術文化育成組織に引き継ぎました。室内楽は浸透に時間がかかる。私も少々、セッカチだったかもしれない（笑）。

その点、札幌なら人口が多く、音楽を愛する人も多いはず。ミラノやパリを旅すると、庶民がオペラを楽しみ、舞台がハネた後、ゆっくり食を楽しんでいるでしょ。あの生活は素晴らしいと心底思い、札幌本店を開く暁には、その「憧れ」をカタチとして提供したい、と願うようになりました。

3年前、札幌駅前に土地が確保でき、設計です。一階は店舗。次に喫茶。ギャラリー。レストラン…。階を積み上げ、ホールを構想しました。音楽が、食と共に安らぎの時を紡ぐ「おもてなしの空間」づくり。ただ敷地から割り出すと客席は最大でも221。自社だけでは採算が難しい。諦めかけた矢先、折良くヤマハさんが店舗とホールの移転先を模索中と聞きました。話してみるとピアノ発表会など年130日は借りてもらえ、賃料で収支も見通しがつく。巡り合わせに「神の手」を感じました。

音響も上々の仕上がり、時間と共に成熟するそうです。信頼する岡山潔さん（ヴァイオリン奏者。東京藝大名誉教授）を監督に戴き、オープニングシリーズも終えました。償却にこの先12、3年はかかるでしょう。ホールが豊かな「社交の場」として永続出来る経営の枠組を固めて、次代に託すことが私の責任。今から肝に銘じています。

人生における分岐点

—三原 剛

Keizo Matsui

提出期限の締め切り間際だというのに、白紙の進路希望アンケート用紙をじっと見つめている高校二年生がいました。理系or文系？数年前から理系に進むと心に決めていた彼が今になって、何故深い溜息をついているのでしょう。どうやら彼は、進路を決める締め切り間際になって自分の気持ちに嘘をつけなくなってしまったようです。実はその高校生は、数十年前の私です。それまでの私は「音楽」＝「生涯における最高の趣味」と考えていました。そんな私に音楽の道へ進む決断を促したのは「締め切り」という現実だったのです。

決断した翌日に進路相談の為に向かった高校の音楽教員室で、私は幸運に恵まれます。当時、関西二期会で数々のオペラの主役を歌われていたテノール歌手佐藤時彦先生がそこにいらっしゃったのです。素晴らしい先生に巡り会えた瞬間でした。音楽コンクールに挑戦しようと思い立ったのも締め切りの3日前、予選や本選で歌う十数曲を何とか選曲し、応募用紙に記入して提出したのは締め切り当日でした。コンクール入賞を期に、多くの邦人作曲家の作品を演奏する機会をいただきました。

高校二年生まで本格的に音楽を勉強した経験が殆ど無かった私でしたが、子供の頃は児童合唱団に所属し、ボーイソプラノとして活動していました。随分後になって両親から聞いたのですが、初めて児童合唱団で独唱をさせていただいたのが4歳のとき、会場は何とフェスティバルホール、今でもその事実に自分自身驚きを隠せません。

当時ステージで歌った1曲はいまでも完璧に歌えるほど歌詞もメロディもよく覚えていますが、どうしても曲名を思い出せずにいたのです。ある演奏会のリハーサル当日「お子さんへのお土産にどうぞ」と作曲家の磯部俶先生が一枚のCDを下さいました。そのCDをきいてみるとその中に4歳の私がステージで歌ったあの曲が収録されていたのです。それは中田喜直先生、大中恩先生、磯部俶先生など大作曲家の先生方たちによって結成された「ろばの会」による『音楽ものがたり チュウちゃんが動物園へ行ったお話』という作品の中の「ペンギン」という曲で、作曲は磯部先生でした。

さて、2011年の9月、フェニックスホールの谷本さんに、R・シュトラウス『イノック・アーデン』作品38に寄せる熱意を伺いました。『イノック・アーデン』は以前からとても注目していた作品でいつか演じてみたいと漠然と考えてはいましたが、朗読とピアノという特殊な作品に踏み出す勇気がなく、いつまでもお誘いにお返事できない状態でした。演奏会予定は一年後、一日も早くコンサートスケジュールを計画するお立場である谷本さんは「締め切り」も設定せずに私が決意するまでの3ヶ月の間ひたすら待ち続けて下さいました。恩師 畑中良輔先生の素晴らしい日本語訳と巡り会ったことは私にとってこの上ない幸運でした。

振り返ってみますと分岐点に立たされたとき、私の背中を押してくれたのは「締め切り」ではなく「想い」なのだと改めて感じています。

感謝を込めて。

三原 剛(みはら・つよし)／バリトン歌手

大阪芸術大学卒業。卒業時に演奏学科長賞受賞。第22回日伊コンコルソ金賞。第61回日本音楽コンクール第1位。第4回五島記念文化財団オペラ新人賞を受賞、奨学生としてドイツ・ケルンに留学する。2006年ザルツブルク音楽祭に招かれ、イタリア国立RAIオーケストラによるヘンツェ作曲オペラ「午後の曳航」に出演。フィルハーモニー(ベルリン)、アウディトリウムRAI(トリノ)にも出演し好評を博す。その他国内外で、オペラやオーケストラとの共演など多数出演。バリトノ・カヴァリエーレ(騎士的バリトン)と評される豊かで気品溢れる声と多彩な表現力は、多くの賞賛を集めている。グローバル東敦子賞、大阪文化祭賞など多数受賞。大阪芸術大学教授。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月　2015年11月
発　　行　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編　　集　吉元 晃
デザイン　松井桂三有限会社